

【めざす児童像】

- ・明るい子
- ・正しい子
- ・たくましい子

学校だより

浜っ子No16

平成29年2月2日(木)

ひたちなか市立那珂湊第二小学校
029-262-2744

特集 湊中学区少年の主張大会

平成29年1月28日(土)、しあわせプラザにおいて、第17回湊中学区少年の主張大会が行われました。本校からは、6年生の鈴木 知惟さんと小室 周太郎さんの2名が代表として発表しました。今回の浜っ子では2名の発表した内容について、その全文を紹介します。



私の友達

6年 鈴木 知惟 さん

私は、友達のことを宝物だと思っています。いつも気づけば友達と一緒にすごしている私。一緒にいるだけでうれしくて、毎日がとても楽しいです。学級では一緒に学習したり、給食を食べたり、休み時間には、みんなと一輪車でメリーゴーランドという技をしたり、校庭を散歩したりしました。また、低学年の子と鬼ごっこをしたりして仲良くなることもできました。学校行事では、

浜っ子祭りで、学級ブースやダンスなどみんな協力して楽しく活動したり、宿泊学習では初めての宿泊にドキドキしながらも、一緒にねたり、トランプをして遊んだり、とにかく楽しい思い出がたくさんでき、友達と一緒にすごせる学校が私は大好きです。

しかし、つらいこともありました。自分の気持ちを言葉でうまく伝えることができなくて、ごかいされてしまったこと。かくし事をされている気がして、ずっとモヤモヤしたことなど。特に悲しかったことは、遊びたかった友達と、用事があった遊べなかった時のことです。みんなが遊んだ時の話をしていたので、とてもさびしくて、悲しくなっていました。みんな、かくしているわけでも、私を仲間はずれにしているわけでもなかったのですが、なんだかとてもさびしく感じてしまいました。「私も入れて」というたった一言が言えなくて、とてもつらくて、不安で何をしても気になって……。あんなに楽しかった学校も楽しくなくなり、学校に行くことが不安になってしまいました。でも、ちょっと勇気を出して話しかけてみようと思いました。すると、今までなやんだ事がうそのようにずっと消え、仲間に入ることができました。その時とても安心したことを覚えています。友達とうまくいっている時は、学校がとても楽しかったのですが、友達とうまくいかない時は学校も楽しくなくなってしまう事を体験した出来事でした。

友達に自分の気持ちがうまく伝わらなくて、誤解されてしまったり、何かかくしているのかどうたがってしまったりすると、ずっとモヤモヤした気持ちになります。そういう時は何が悪かったのか、どうすれば伝わるのかとよく考えて、勇気を出して伝えるようにしています。私の友達は、気持ちを正直に伝えれば必ず分かってくれます。伝わったとき、分かってくれたときは心の中のモヤモヤがすっかり晴れるのです。なやんだり、迷ったりしても、何でも打ち明けて話すこと、相談することで分かり合える友達が、とても大切な存在なのだと気付くことができました。何でも話せて、相談でき、悲しいときにそばにいてくれる、そのことがとても心強く感じます。そんな友達が私にとっての宝物なのです。

楽しかったこと、つらく悲しかったこと、様々な経験を通して、友達とのきずなも強くなりました。わかり合うことが難しいと感じたこともありましたが、乗り越えることで、友達の大切さを今まで以上に感じるようになりました。友達とは、良いときも悪いときも、本音が言える存在、楽しいときもつらいときもそばにいて、一緒に喜んだり考えたりしてくれる存在、それが私の友達であり、宝物です。私たちの学級は、28人がクラス替えもなくずっと6年間すごしてきました。これは、それだけで宝物です。

これから先、中学、高校と進学していきますが、こんなに一緒にすごせる仲間は2度とあらわれません。小学校1年生のまだまだ幼い頃から小学校6年生の今現在まですごした仲間。その仲間とすごした6年間をほこりに中学に進んでいきます。

(裏面へ続く)



心のバリアフリー

6年 小室 周太郎 さん

6年生の2学期に行った1分間スピーチで「気になるニュース」について発表しました。ぼくが発表したニュースは、「障害者施設でおきた殺人事件」についてです。

この事件は、平成28年7月26日に起こったものです。ぼくは、このニュースの中で加害者が言っていた、「障害者がいなくなればいい。」という言葉がとても気になりました。なぜ、この言葉が気になったかという、ぼくには障害をもったいところがいたからです。そのいところは、歩くことができず言葉をしゃべることも、自分で食べ物を食べることもできませんでした。でも、学校の授業でお習字をやったり、絵をかいたりすることが大好きでした。ぼくが話しかけると、いつもうれしそうに笑ってくれ、家族にとってはいやしの存在でした。

いとこの名前は、まいちゃんと言います。ぼくはたまにしか会うことができませんでしたが、ぼくがピアノを弾いてあげると、うれしそうに表情が変わり、ぼくもうれしくなりました。

そのいとこのまいちゃんが、おとしの3月に亡くなりました。高校2年生でした。急に亡くなったので、最初は信じられませんでした。ぼくがまいちゃんにしてあげられることは何もありませんでしたが、ピアノを弾いたり話しかけたりすると、笑ってくれたまいちゃんを思い出し、なみだが出ました。おそう式に行ったとき、まいちゃんのお父さんもお母さんも泣いていました。その姿を見たとき、とても悲しかったです。障害があったとしても、大切な大切な命なのです。「障害者がいなくなればいい。」という言葉が気になったのは、まいちゃんがいなくなった後の悲しみの大きさを感じたからだと思います。「いなくなればいい人」なんていないと感じたからです。まいちゃんのお父さんとお母さんは、東京に住んでいます。月に1、2回お墓参りに来ます。まいちゃんのことを忘れずに、ずっと大切に思っているのだと思います。家族にとってまいちゃんは、昔も今も変わらず大切な存在なのだと思います。

障害者施設の事件では、障害のある人もない人もたくさんの方が亡くなり、家族を亡くした人にとっては、とても悲しくつらい出来事だったと思います。そして、そのこと以上に、「障害者がいなくなればいい。」という言葉もつらく悲しいものだったと思います。

今回、ぼくは「心のバリアフリー」ということについて考えました。「心のバリアフリー」とは、障害の有無に関係なく育まれる仲間意識のことです。例えば、普段の生活の中で、車いすの利用者が困っているとき、どう接したらいいかわからず、声をかけられないことがあります。助けなければいけないという思い込みは、求められていない手伝いをしてしまうことになります。助けなければいけないという意識のかべを取り除くことこそ「心のバリアフリー」なのです。もし、車いすの利用者の方が困っているようなときは、自然にあいさつをして、声をかけられるようになりたいと思います。

2016年は、オリンピックの年でした。ぼくは、オリンピックの後に開かれたパラリンピックも見ました。それは、障害のある人が、様々な競技でメダルを目指す大会です。車いすの選手が、車いすを自在に操ってテニスをする姿や、両足に義足を付けた選手がトラックを全力で走る姿を見たとき、ぼくは信じられないくらい感動しました。障害があることをかわいそうだと思うのではなく、プレーする姿、走る姿に感動したことは、今までにはありませんでした。これも、「心のバリアフリー」なのかもしれません。

2019年には茨城国体が、2020年には東京オリンピックが開かれます。どちらも障害のある方々の大会も行われます。大会会場では、施設整備が進められ、障害のある方々も精一杯競技できるようになるそうです。そして、その設備や、「心のバリアフリー」という意識が社会に取り入れられていくといいと思います。

まいちゃんの存在は、ぼくにとってかけがえのないものであり、多くのことをぼくに教えてくれました。そして、今回この作文を発表することで、人と人の絆や「心のバリアフリー」について深く考える機会がもてました。

これからぼくは、たくさんの方と出会うと思います。障害のある方とも出会うと思います。そのとき、何か特別なことができるわけではないけれど、あいさつをしたり、声をかけたりしたいと思います。ぼくが、まいちゃんと過ごした時間の中で、心が通じ合えたと思えたように、うれしいとか悲しいとか、何か感じ取れたらいいと思います。